山里小学校だより　R8.１１.６号

文責　校長　田川　雄一

やさしさと　思いやりで

笑顔がいっぱい！

最後までつないでつないでやさしさリレー

第77回 平和祈念式　11. 5

昭和２４年１１月３日「あの子らの碑」の建立除幕式が行われました。以来、山里小では、毎年この時期に「平和祈念式」を行い、平和の誓いを新たにしています。

今年度７７回目の平和祈念式は、雨のため体育館で開催しました。西本徳明長崎市教育長様をはじめ、多数のご来賓に来校いただき、献水、献花、「あの子」の合唱、「平和の誓い」等を通して、皆で恒久平和を誓いました。



今年度は新たに式次第に加わったのは「原子雲の下に生きて」の朗読です。５年生代表児童３名が、感情を込めてしっかりと朗読をしました。





また永井隆記念館 館長の永井徳三郎さんからは、山里小で歌い継がれている「あの子」の完成までの経緯を紹介していただきました。最初に作られた歌詞は次のとおりです。

「あの子のは」

背戸の林の下つゆの
つるりんどうの花かげに
今朝も落ちてる栗七つ
ああ　あの子はどこに行ったやら

運動会のスピーカー
きこえる部屋で出してみる
去年走った白いシャツ
ああ　あの子はどこに行ったやら

待てど帰らぬものならば
歌って通る子供らを
かくせコスモス門の道
ああ　あの子はどこに行ったやら

私たちが歌う「あの子」の歌詞とは、違った部分が多くあります。「永井博士がいろいろな人と話し合って出来上がったのが今の形ではないか」と、徳三郎さんは話されていました。言葉を選び、練り上げて作られた「あの子」、子どもたちはこうした経緯を知り、より愛着を込めて「あの子」を合唱していました。

児童代表の作文発表も素晴らしい内容でした。山里小で平和を学ぶ一人としての当事者意識がしっかりと伝わってきました。きっと多くの子どもたちが同じような思いで、この発表を聞き、これからの自分の生き方を考えたのではないでしょうか。

全文を紹介します。

「私たちがつなぐ」

山里小学校　六年

私は今、山里小学校に通っています。長崎市は、原子爆弾が落とされてから今年で八十一年が経ちます。今は、本当に原子爆弾が落ちたのかと思うくらいに街は発展しています。けれど、街の細かなところに目を向けると、爆弾のつめあとが今もなお残っているのです。人々は被爆した後も病気で苦しめられたり、建物や物にさえ焼かれた跡が残っていたりしています。私たちが通っている山里小学校にも、防空壕が残っています。

そんな山里小学校には、語り部として被爆された方が来ることがあります。お話を聞くたびに胸がしめ付けられる思いになり、「本当にあったことなんだろうか」と耳を疑います。ここ山里小学校で当時、被爆した子どもたちは、私たちと同じくらいの年代なので、そのことを思うと本当にいたたまれません。私は、ある被爆者の方の言葉に強い衝撃を受けたことがあります。それは、目に涙をためながら言われた「次は、皆さんが平和の素晴らしさ、戦争の悲惨さを伝えてくださいね」という言葉です。これまで、自分たちが戦争や平和について伝えようと考えたことがなかったからです。当時、小学五年生だった私には、それが本当に衝撃でした。

それから、私たちに伝えられることはないのかとたくさん調べました。そして、「ピースソングプロジェクト」という、純心大学の方々と歌を作っていっしょに歌うイベントを見つけました。今までは積極的には参加しなかったけれど、被爆者の方の話を思い出し、思いきって参加することにしました。イベントでは、山里小学校と純心大学がいっしょになってオリジナルの曲を作ってホールで歌いました。その時の私は、「このような活動に参加すること自体に大きな意味があるのではないか」と思いました。

それから、六年生になった今、今度は八月九日にある長崎市平和祈念式典に、児童合唱として参加することになりました。式に参加したからといって、すぐに世界が平和になるとは限りません。しかし、一年前と同じように、参加をして世界中に向けて「あの子」の歌声を届けることには、とても強い意味があると信じています。

私は原爆を体験していないので、本当の恐ろしさは分からないかもしれません。しかし、平和の大切さはこの六年間でたくさん学んできました。だからこそ、私だから伝えられる思いがあると思います。

私が山里小学校で積み上げてきた六年間を無駄にはせず、被爆者の方が言っていたように、次は私たちが代わって、平和の大切さや原爆の恐ろしさを世界中に伝えていきたいです。そして、戦争によって、二度と傷つく人や悲しむ人が出ないように、これから何年先もずっと世界が平和であるように、長崎の地から平和を願い、歌い続けたいです。

